

菊池寛の作品の中に現れた女性像

—女性と職業—

唐 麗 燕*・陳 月 吾**

Images of Japanese women in Mr. Kankikuchi's Novels

— Women and employment —

Liyan Tang and Yue wu Chen

Mr. Kan Kikuchi described various images of Japanese women in a series of his lengthy novels from Shinju Fujin(Pearl Lady)(June,1920)to Utsukusiki Shokunou(Beautiful Working Ladies)(January,1941).

At the time when Shinju Fujin was published it was still generally considered that women remained weaker than men in many respects. However, the ladies in his many novels claimed their own dignity, dependence and freedom.

I would like to analyze the many images of Japanese women whom Mr. Kan Kikuchi describes in his novels from points of view such as women and employment.

(一) 女性職業の変遷

明治末年、高等女学校の生徒の数が増えることに従い、学校を出ると勤めに出る女も多くなってきて、職業婦人という言葉が現れる。

明治43年6月、「東洋時論」第一巻二号に「女子職業熱の勃興」という評論が掲載された。

我国最近数年来における著しき現象の一つは女子職業熱の勃興である。その及ぼすところの影響はすこぶる重大広汎で、その包括する範囲は家庭、教育、労働問題に及び、その結果を想像するとあるいは、根本的に社会の改革を引き起こさざるを得まいと思われる。なんとなれば、これまで女子は男子の陰に隠れて、単に子を産み、これを育て、台所の作業を専業として家の留守番にあまんじ、ただ男子の付属物に過ぎないで、社会の一員として待遇せられなかったのであるが、いまや男子と同様に工場において労働する、学校において教鞭をとる、銀行会社において書記となり、傭人となる、商店において売子となる、その他医師に、産婆に、看護婦に、各方面においてそれぞれ適当なる職業に従事するという事になってくると、もはや女子は、男子の陰に隠れているところの付属物ではない。社会の表面に現れて、男子と相並んで社会に活動するところの一要素である。

* 教養部 ** 中国中南大学 教授

このように明治末になって女の職業熱は目立つほどの高まりを見せたが、しかし社会全体から見ればまだ限られた一部の現象に過ぎなかった。大半の娘は原則として思春期を家庭で過ごすのが常識であった。そして、貧しければ女中にするのが通常の道であった。女中は生家を離れて他人の家に住み込むことであるが、やはり家であることには変わりはない。彼女はそこで家庭生活の修業を身に付けることができる。だから親は安心して子供を手放すことができた。だが社会に出て職につくのはそうはいかない。なによりも不安なのは不特定多数の男性といり混じって働くことである。当然誘惑の機会も多く、したがって墮落の危険もあると見なければならない。この恐れは、当事者より親たちに強かった。そして子供の就職の決定権を握っているのは、多くの場合に親であったから、彼らが反対することによって女が職業につく機会は非常に制限されていたということできる。だから当時の職業婦人は、ごく一部のものについては、先端的だとしてジャーナリズムから評価されたりしたが、一般的には疑わしい目で見られ、嫌悪や反感を受けることが多かった。女が職を持って働くことが、なにか女の道に外れた、女らしくない不当な行為のように感じられたのである、それは、延いては結婚にふさわしくない女から、結婚にふさわしくない行為をしている女、貞操を顧みない女にまで拡大解釈され、敬遠される傾向まで生んだ。女の働きが家に限定され無償労働の時にはなんら問題とならなかったが、女の働きが家を離れて有償労働となった時、これだけの非難や偏見が生じたと言うことは、いかに家制度の影響が大きかったかを物語っていた。

大正期に入ると、女が職につくことはもはや婦道に反したこととは言えず、女の新しい生き方として認める気運が一方に生まれるようになってきた。大正中期を過ぎ、女事務員の数が増加し普及してきた。生活の為に働く娘が圧倒的に多く、真面目で勤労意欲に富んだ職業婦人が増えていった。

しかし男尊女卑の風潮と強固な家制度の観念は、大正になって劇的に変化したわけではなかった。あまり変わりはないので、明治以来の職業婦人に対する偏見、軽蔑、反感が依然として残っていた。働く女を見下してバカ呼ばわりするなど、今日では想像できないことが当時はいくらでもあった。女店員をカフェの女給扱いすること、献身的な看護婦が冷たい目で見られること、「職業を持つ私たちをともすれば不良呼ばわり」(職業婦人の声)することなど、すべて偏見、軽蔑、反感の現れである。

従来からも、職業婦人の問題は社会の注目をあつめ、さまざまな角度から議論されてきた。もちろんフェミニストである菊池寛がこの敏感な話題を見落とすわけではない。彼は自分の作品にいろいろな職業女性を登場させていくのである。

(二) 菊池寛の作品に描かれた職業女性

菊池寛は「女性の戦ひ」(「婦人倶楽部」昭和13年1月～昭和14年5月)に、なほみを主人

公として登場させた。

養子として、貧しい家庭に育てられたなほみは、養父が病んで以来、デパートの売子として働くようになった。彼女の美貌に動かされた秋田子爵は、彼女を自分の会社の映画女優にしようとしたが、志操の堅いなほみに二べもなく断られた。しかし、運命はなほみを何時までも女店員にしては置かなかった。彼女は元々血統は争われず、高沢伯爵の私生子であった。結局、「男はともかく、女は働かなくてもいい身分であれば、働く時間で、女性としての教養を身につけた方がいいと思ふ。尤も、お前は人格的にはあくまで立派な事をわしは信ずるが、人格は花で教養は匂ひのやうなものだからね。今まで、お前を働かした償ひとして、お前を立派な家庭の一員として、いろいろな稽古や手芸などを覚えて貰ひたいのだ・・・これ以上、お前に苦しい仕事をさせたり、誘惑の多い場所へ置きたくないのだ。」という実父である高沢伯爵の言葉によって、なほみはデパートの仕事を止めて、売子から一転して上流社会のお嬢さんになった。

菊池寛はこの作品を「女性の戦ひ」というテーマにして、現代の若い女性が如何なるものと戦い、女性の勝利とは如何なるものであるか、を書こうとしていると思われるが、結局不戦の「勝利」に終わることになった。

「心の日月」（「キング」昭和5年1月～昭和6年12月）の主人公麗子も、なほみと同じように、売子として働く女性である。両親に決められた結婚を避けるために、東京に出奔した麗子は、いろいろな職業を経た後、最後には売子になった。麗子が売子の仕事をやめることを得たのは、なほみのように高貴な血統を持っていて、上流社会の男性（中田）に愛されたからある。

「女性の戦ひ」のなほみ、「心の日月」の麗子のように、生活が苦しいので、一家のため、あるいは、自立のために職につき、働きながら自己を向上させようと、勉学の道をもとめる女性がいる。彼女らは就職によって人との接触がふえ、社会体験が広まるにつれて、自分の教養の不足を思い知らされ、もっと勉強しなければならないという気持ちを強めていく。他方「女性の戦ひ」の副主人公の玲子、「新女性鑑」（「報知新聞」昭和3年5月～9月）の夏江のように、安定した家庭に生まれたことを当然として、花嫁修業で家庭に閉じこもり、花やお茶、三味線などの遊芸以外にはほとんど関心を持たない有閑階級の娘たちがいる。

現在の私たちの目から見れば、いかに当時の家庭に閉じこもっている幸福な娘たちが古く見え、働く娘たちが生き生きとして新鮮に感ずるか。だが、当時は全く逆であったのである。

たとえ、職につくことが即不行跡に結びつくというような誤解は少なくなったとしても、良家の娘はやはり家にとどまることを理想とされた。職業婦人に纏わる誘惑や墮落の危険はなお払底できず、いつでも、警戒されていることが、「女性の戦ひ」のなほみの実父、高沢伯爵の話からはっきり見える。女が職業につくのは、自立のためではなく、貧乏で、生きるために働かなければならないからである、というのが当時の社会の一般的な観念であっただろう。

だから、すでに上流社会のお嬢さんになり、あるいは上流社会の男性と結婚する予定があり、貧乏と無縁になったなほみも麗子も、少しもためらうことなく職業女性の生活と訣別した。

前の二作と比べると、「生活の虹」（「名古屋新聞」昭和9年1月1日～同年5月17日）の綾子

は、職業女性としての心構えがずっと徹底している。

綾子は、エレベーター・ガールをしながら女子の専検（当時の女学校をでたのと同じ資格がつくための試験である）の準備をしている。そのために、子爵の会社の事務員になることを惜しみなく断り、子爵の求婚も体裁よく断った。しかし「専検をパスした後で、彼女はどうか、それは彼女にもわかっていない。」のは隠れない事実であった。

幸運なことに、綾子はなほみと同じように、貴族の血統の子爵の実妹であることが分かり、エレベーター・ガールの仕事を止めることができた。

だが、子爵の妹の典子がもっと寛容な人であったら、綾子もなほみと同じように、それからずっと有閑娘の生活ができるだろう。しかし典子の刻薄で、彼女の有閑娘の生活は長くは続かなかった。典子の軽蔑に対して、綾子は次のような堂々の反駁をする。

私は貧しく育ちましたわ。でも、働くことを知っています。他人に隷属しなくても立派に一人で、暮らせるように、育てられました。私はどんな事が恥だかよく知っています。ただ、いい家に生まれたというだけで、威張っていらしゃる事こそ、恥ぢやございませんの。

結局、元の生活が恋しくなってきた綾子は、子爵令嬢たる位置を蹴って、新京という新しい天地で、職業女性としての生き方を選んだのである。

「不壊の白珠」（「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」昭和4年4月22日～9月6日）で会社員として働いている俊枝も、いろいろな人生の選択に直面して、最後には会社の専務の求婚を断って、自活の職業女性の道を選んでいく。

内容からいえば、綾子、俊枝こそ、社会の偏見と、世俗の職業女性に対する軽蔑と、身をもって戦った女性である。これらの作品のテーマを「女性の戦い」にすればもっと適切ではなかったかと思う。

しかし、菊池寛の作品の職業女性を見渡すとき、綾子や俊枝のような、「戦っている」売子、会社員などの主人公はわりとすくない。女優、ダンサー、女給、芸者として登場する主人公が驚くほど多いのである。

「街の姫君」（「キング」昭和10年1月～昭和10年10）の千恵、「恋愛白道」（「講談倶楽部」昭和10年10～昭和12年8月）の清美、「明眸禍」（「婦女界」昭和3年1月～昭和4年10月号）の珠子、「東京進行曲」（「キング」昭和3年6月～昭和4年10月）の道代、「貞操問答」（「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」昭和9年7月22日～昭和10年2月4日）の新子、「花の東京」（「東京新聞」昭和7年4月11日～8月25日）のあいなどはみんなそのような主人公である。菊池寛はなぜ、しばしばそういう職業の女性を主人公として登場させたのだろうか。それを究明するには、菊池寛の女性職業観を見落とすわけにはいかないだろう。

（三）菊池寛の女性職業観とその限界

まずは、もう一度「生活の虹」に戻ってみよう。作者は最初、こういう風に主人公の綾子の職業を紹介した。

現代の若い、夢を描く貧しい娘達が―貧しくなつても、自分で華手に生きやうとする娘達が、カフェーへ、ダンスホールの舞台に殺到する間に、元木綾子が天性の麗質を抱きながら、敢然としてエレベーターのハンドルを手にしつつ、職業制服の処女の純潔を保つ事ができるのは、この伯父の力にもよつてゐるのである。

作者が綾子のような職業女性に感心していることは秋田子爵の心理描写から窺えると思う。

綾子ばかりでなく、一般の職業婦人だつて、みんな家庭のため、父母のため、弟妹のため働いてゐるのではないか。典子や芙美子などの有閑娘が軽蔑し得る資格は少しもないのである。

上述の描写から分かるように、菊池寛は、女給、芸者などより、堅実な店員、事務員などの女性を理想としている。

しかし作者は決して女給、芸者の仕事を軽蔑しているのではない。

作者は「東京進行曲」で、佐久間の言葉として次のように言う。

芸者のなかにも、魂の淨い人があります。どんなに教養がなくても、魂の淨い人がありますからな。

また、同じ作品中、主人公の良樹の心理の動きを以下のように描写した。

良樹は世間から淫蕩で淫薄だとおもわれてゐる女給が、思ひがけなく親や肉親のために、生活のために生活の闘士として戦つてゐることを知つた。彼女らの華やかな長い袖はしばしば実生活の血と涙にしめることを知つたのである。それを知ると共に、それら生活闘士の貞操をわずかの金銭によつて汚さうとする男性に対して、激しい義憤を感じずにはゐられなかつた。

つまり、作者は女給や芸者たちに深い同情を持っているのである。

しかし、しばしば彼女たちを主人公として登場させる主因は、単なる同情からではなく、どうすることもできないといった、諦めなのではないか。

菊池寛の作品には、よく女性求職の場面が出てくる。例えば「勝敗」で、こういうふうに書かれている。

婦人の職業なんかありませんね、特にあなた方のやうなインテリな方の仕事なんか・・・(略)
東京中にインテリてきな婦人の職業位置がいくつあるでしょう。婦人記者とか、女子編集とか
そんな位置ですね、僕はおそらく四十、五十ぐらいしかないと思ふんですよ、有力な婦人雑誌
が五つ、六つ在りますね、それが四人ずつ使つたつて、二三十人でしょう。そのほか、新聞社、
出版書店を合わせて五六十しかないと思ふんです。・・・しかも、それが全部、満員で、年に
二三人しか欠員ができないでしょう。ところがそういふ位置を志望してゐるインテリ婦人の数
といへば、東京だけでも千五百はあるでしょう。

これが当時の女性求職難の実情であるだろう。

ところで、昭和四年の春、菊池寛がこの実情に対して、自分の会社に「文筆婦人会」というの
を設けた。彼はこういつている。

「文筆婦人会」というのが、新職業として存在してくれば、それだけで、文筆婦人は助か
ると思う。近来女子教育が盛んになり、教養ある婦人の数が激増していながら、社会には職業
婦人を容れる余地がないのである。こういう新職業が成立すれば、教養ある婦人にとって、い
いことだと思ふ。

しかし、就職難にもかかわらず、インテリ婦人とか一般の女子事務員とかを問わず、幸運にも
就職口が見つかったらどうなるのか。

作者は「貞操問答」(「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」昭和9年7月22日～10年2月4日)
でこう言うのである。

いや、就職口を探せとおつしやるなら、僕はどうしても、探します。しかし、現在女事務員の
月給なんて、結局三四十円ですからな。貴女一人のお化粧品代と交通費になるかならないかです
からな。尤も貴女お一人の小遣いさへあればとおつしやるなら、それで問題はありませんけ
ど・・・

そう言われてみると、その通りだった。結局、特殊の技能を持っていない限り女一人が働いて
一家を支えようなどというのは、妄想に近かったのである。

菊池寛は、女子事務員の収入について(「婦人サロン」昭和4年9月)、こう書いている。

女性として独立した生活を支持する収入を取るものは、カフェの女給だけといつたので、丸
ビルに勤めてゐられるタイピストの方から抗議があつた。しかし、私は女性が独立して生活し、
ある程度生活を楽しむためには、百二十円、少なくとも百円の月給を必要だと思ふのである。
下宿料が月々五六十円とし、四季に一枚の着物を新調するぐらいでなければ生活を楽しんでゐ

るとはいへないと思ふのである。六七十円で暮らしぬられる方もあるだらうが、さう云う人は、その精神的力で欲望をある程度まで節抑してゐると思ふのである。わたしの寡聞では、百円以上の月収があるのは、女給よりほかに聴かないのである。むろん、女医師とか高給の女先生などにはあるだらうが、普通にはさう沢山あるやうには思へないのである。さう云う点で、私は職業婦人のためになげかずにはゐられないのである。

作者によると、婦人の働き口が非常に狭く、就職してもまだ婦人の独立が一般に保証できない、というのが社会の実情であつた。そのような女性が、たとえ社会、現実と戦つても勝つはずはないだらう。だから菊池は、その戦いを女給たちに任せたとのである。

作者は、女給についてこんな風に書いている。（「改造」昭和6年1月）

女給と言ふものは世間で思つてゐるほど墮落してゐるものではない。十人居れば、一人位妖婦がゐる。然し一人位は、処女がゐる。二三人不良が居れば、二三人位は、親兄弟の為に働いてゐる感心な女がゐる。そして、後の四五人は、普通な女であると言ふ割合である。

銀座のカフェの女給が、僅かの金銭で売笑するなど言ふことも、甚だしいウソである。一流の女給は、想像以上に志操堅固である。東京進行曲なる小唄にある如く、ダンサーの涙雨など、銀座に降りることはないのである。銀座についてのおもしろをかしいことは多くは伝説である。

自分の論説を適用するかのように、彼の作品に登場する女給たちは、いずれも家族のために働いている志操堅固な女性である。いずれも事務員のような職業女性に劣らない、しかも経済的に全く独立できる女性である。

しかし、女給、芸者であろうと、他のしつかりした職業であろうと、一旦職業を辞めるチャンスがきたら、辞めた方が最善の選択である、という考えが菊池寛にあつたのではないかと思う。

「生活の虹」の綾子も、「不壊の白珠」の俊枝も例外ではない。もし綾子に刻薄の妹の典子がいなければ、もし俊枝に求婚している片山が五十代で、再婚者でなければ、おそらく綾子も俊枝も喜んで職を辞めたかも知れない。

要するに菊池寛にとっては、女性が一生涯を定める選択に当たって、＜結婚か職業か＞という問題は成り立たないのである。言い換えれば、女性が人生の選択に当たったとき、職業という要素を見落としてもいいのである。それは、まだ婦人の独立を一般に保証していない、日本の社会の通常の考えでもあつた。時代の限界であると同時に、菊池寛の限界でもあつた。

*参考文献

- 1) 川端康成「菊池寛論」（「日本文学講座」13）
- 2) 鈴木亨氏「菊池寛伝」（実業之日本社 昭和12. 3）
- 3) 那珂孝平「長編小説・菊池寛」（日新書店 昭和23. 4）

- 4) 杉山平一「菊池寛作品の平衡感覚」(「国文学」昭 56. 7)
- 5) 金子勝昭「菊池寛の時代」(たいまつ社 昭和 54. 1)
- 6) 佐藤みどり「人間・菊池寛」(新潮社 昭和 36. 3)
- 7) 永井龍男「菊池寛」(時事通信社 昭和 36. 3)

(平成14年11月15日受理)